

メッセージ：安心できる領域と慰め主（聖霊なる神様）

OIC の皆様おはようございます。
ようこそ天の父なる神の家へ来られました。

今日、神様に選ばれた民、イスラエルの民の歴史が、約束の地カナンへとさらに広がっていくのをみます。前回のメッセージは次の言葉で締めくくりました：神様は霊であられ、全能であられます。自分の力に頼らず、神様の力に頼りなさい。私たちは、神様が私達の目の前に巨人を置かれ、どのように御子イエス様と神様御自身に栄光をもたらすようにされるのかを読みます。神様は私たちの目の前の巨人が私たちをつぶすためにされたものではありません。

イスラエルが約束の地に入った歴史の中で、ヨシュアの召命は、神様の忠実さが神様の指導者と神様の選ばれた民への約束を守られることを示しているのがわかります。ヨシュアの個人的な勇気は、指導者モーセの後任として召されたときに、主なる神様がヨシュアに命じられた大きな部分でした。このヨシュアの勇気も本当に神様からの贈り物です。エリコやカナンの巨人を征服するような不可能な使命に神様が私たちを召されるとき、神様は私たちの召しに従うために必要なものをすべて与えてくださいます。だからヨシュアは、キリストの十字架の後で、勝利に満ちたクリスチャンの生き方をするための偉大な模範なのです。

<ヨシュア記 8 章 22 節-28 節>

アイでの最後の捕虜と勝利

22 町に侵入したイスラエル軍も出て来て、背後から敵に襲いかかりました。このようにしてアイは罠にはまり、全滅したのです。生き残ったり逃れたりした者は一人もいませんでした。

23 しかし、アイの王だけは捕虜とされ、ヨシュアのもとに連れて来られました。

24 イスラエル軍はアイの全軍を一人残らず倒すと、町へ取って返し、残っていた人々を次々に打ちました。

25 こうして、アイの全住民一万二千人が、その日のうちに死に絶えたのです。

26 ヨシュアは、最後の一人にとどめが刺されるまで、投げ槍をアイの方に差し伸べたままでいました。

27 ただし、家畜と分捕り物はそのまま残しておきました。それはイスラエル軍のものでした。あらかじめ主がヨシュアに、そうしてよいと告げていたのです。

28 焼き払われたアイは荒れ果てた丘となり、現在に至っています。

罪深い世界を救う槍として福音を差し出す

26 ヨシュアは、最後の一人にとどめが刺されるまで、投げ槍をアイの方に差し伸べたままでいました。

私たちイエス様に従う者は、イエス様のために失われた人々を探し、救うためにできることをしていますが、しばしば悪魔に誘惑され、何の実も結んでいないように見えるため、イエス様のために失われた人々を探し、救うためにできることをあきらめてしまうことがあります。イエス様がご自身の使命を宣言されたのは、当時の社会階級で最下層の取税人の家を訪問された後でした。<ルカの福音書 19 章 5 節—10 節>を読みます。

<ルカの福音書 19 章 5 節—10 節>

5 やがて、そこへ差しかかったイエスは足を止め、ザアカイを見上げると、「ザアカイ。早く降りてきなさい。今晚はあなたの家に泊めてもらうつもりでいますから」と言われました。

6 ザアカイはびっくりして、急いで降りると、大喜びでイエスを家に迎えました。

7 これを見ていた人々の心中は、おだやかではありません。「なにも、あの札つきの悪党の家の客にならなくても……」と言って、つぶやきました

8 しかし、ザアカイは主の前でこう告白しました。「先生。今からは、財産の半分を貧しい人たちに分けてあげます。税金を取り過ぎた人たちには、四倍にして払い戻します。」

9・10 イエスは言われました。「その告白こそ、今日この家に救いが来たことのあかしです。この人も迷い出たアブラハムの子どもの一人なのだから。メシヤ（救い主）のわたしは、このような人を捜し出して救うために来たのです。」

ザアカイの心は、イエス様が自分を選んで訪ねてくださったことを知って喜びに満たされました。神様の霊は、ザアカイにイエス様についての喜びを与え、喜びをもって罪を悔い改めさせ、償わせ、さらに寛大さを与えられました。イエス様は、私たちクリスチャンが社会のあらゆる階級の人々を探し、救うための模範を示されました。イエス様は、人々の罪のために死ぬことによって人々を救われました。私たちは、イエス・キリストの福音という本当に良い知らせを伝えることによって、人々を救うのです。失われた人々を探し、救うためのすべての祈り、トラクト、メッセージや証しは、神様にとって重要です。些細なことでも、粘り強く続けることで、これからいつか大きな実りがあるかもしれません。ヨシュアのように、世界中のすべての国民がイエス・キリストの福音という本当に良い知らせを聞くまで、私たちは福音の槍を持ち続けなければなりません。＜マタイの福音書 24 章 14 節＞でイエス様が言われました。

＜マタイの福音書 24 章 14 節＞

そして、御国についてのすばらしい知らせが全世界に宣べ伝えられ、すべての国民がそれを耳にします。それから、ほんとうの終わりが来るのです。

イエス様が私たちの罪のために犠牲となる前は、カナンのように地上から大罪を取り除く唯一の方法は、罪人を地上から取り除くことでした。しかし、イエス様の犠牲は、イエス様の福音を信じるすべての人々に赦しを与えます。ヨシュアのように、クリスチャンは罪人ではなく、すべての罪が殺されるまで福音の槍を持ち続けます！

そこで次に、ヨシュアは、邪悪な生き方の神様の裁きに対するすべての人への警告として、アイの王を殺すと読みました。

＜ヨシュア記 8 章 29 節＞

29 ヨシュアは、アイの王を夕方まで木にかけてさらし、日が沈むと死体を降ろして町の門の入口に投げ捨てました。その上に積み上げた石の山は、今も見ることができます。

ヨシュアは旧約聖書に記された神様の裁きを宣告しました。＜ガラテヤ人への手紙 3 章 13 節＞にパウロはこう書きました。

＜ガラテヤ人への手紙 3 章 13 節＞

しかし自分の悪い行いのために、私たちが受けなければならないはずののろいを、キリストはご自分の身に引き受け、私たちを律法ののろいから救い出してくださいました。聖書に、「木にかけられる者はだれでも、のろわれた者である」（申命 21・23）と書いてあるからです。

神様の契約が更新された - 聖霊なる神様 - 慰め主

イスラエル軍の戦士とイスラエルの民は、氾濫期のヨルダン川に乾いた地面があらわれその上を歩きました。イスラエル軍の戦士とイスラエルの民は、神様がエリコの城壁を崩れさせ、イスラエルに勝利をもたらせ、エリコの王を打ち負かすのを見ました。イスラエル軍の戦士とイスラエルの民は、これらの奇跡の中で、神様の御霊の臨在における全能の力を経験しました。神様の御霊とのより個人的な関係は、イエス様が十字架でそれを買取られたときまで、主を信じる多く

の信者にとって生じるだけでなく、神様の民は三位一体の第三位格である聖霊なる神様を知っていました。イスラエル軍の戦士とイスラエルの民は、天地創造に関する聖書のように、主の力強い行動を知っていました。

<創世記 1 章 2 節>

地は形も定まらず、闇に包まれた水の上を、さらに神の霊が覆っていました。

神様の民もまた、預言者イザヤのメッセージを通して神様の霊を知っていました。紀元前 700 年頃、イザヤは、イスラエルの民がいかにも嘆き悲しみ、モーセの時のように神様が力を持って戻ってこられるよう神様に呼びかけていたかを語っています。わたしたちはこのことを<イザヤ書 63 章 10 節-14 節>で読みます。

<イザヤ書 63 章 10 節-14 節>

10 ところが、彼らは神に反抗し、神の御霊を悲しませたのです。それで神は、彼らの敵となり、彼らと戦ったのです。

11 その時、彼らは神のしもべモーセがイスラエルをエジプトから連れ出した時のことを思い出し、叫びました。「モーセを羊飼いに立てて、イスラエルの民を導き、海を通らせた方は、どこにいますか。ご自分の国の中に御霊を送られた神は、どこにいますか。

12 モーセが手をあげた時、人々の見ている前で海を二つに分け、ご自分の評判を永遠のものとした方は、どこにいますか。

13 人々に海の底を通らせたのは、どなたですか。彼らは荒野を駆け巡る優秀な馬のように、少しもつまずきませんでした。

14 谷間で草を食べる家畜のように、主の御霊は彼らに休息を与えました。」こうして神は自ら、ご自分の名声を不動のものとしたのです。」

旧約聖書のヘブライ語聖書では、聖霊なる神様はルアと名付けられ、息という同じヘブライ語です。新約聖書の著者は聖霊なる神様をパラクレトス（ギリシャ語）と呼んでいます。これは文字どおり、助けるためにそばに呼ばれた者という意味です。最初に西暦 30 年のペンテコステの日曜日に、イエス様を信じるすべての信じる者達に聖霊なる神様は与えられました。<使徒の働き 1 章 4 節-5 節>でイエス様はご自身の弟子達に命じられました。

<使徒の働き 1 章 4 節-5 節>

4 そんなある時のことです。イエスは使徒たちに、こうお命じになりました。「エルサレムから離れてはいけません。前にも言ったように、父が約束を果たしてくださるまで、待っていなさい。

5 バプテスマのヨハネは水でバプテスマ（洗礼）を授けましたが、もうすぐ、あなたがたは聖霊によるバプテスマを受けるからです。

旧約聖書と新約聖書において聖霊なる神様がどのような特別な働きをされたとしても、神様の民は皆、聖霊なる神様は今も昔も地上における神様の全能の存在であることを知っていたし、今も知っているはずですが。聖霊なる神様はモーセとともに紅海に、ヨシュアとともにヨルダン川に、そして神様の民イスラエルのための神様の解放のすべてに現れられました。イエス様が来られたので、聖霊なる神様はいつもと同じことをされます。聖霊なる神様は罪人をサタンの掌握から救い出し、イエス様への信仰の賜物を授けます。私たちがイエス様と対面するまで、聖霊なる神様は常にイエス様を証ししてくださいます。

<イザヤ書 63 章 14 節>にあるように、今日、聖霊なる神様はクリスチャンに平安を与えられます。

<イザヤ書 63 章 14 節>

14 谷間で草を食べる家畜のように、主の御霊は彼らに休息を与えました。」こうして神は自ら、ご自分の名声を不動のものとしたのです。」

ヨシュアの指揮の下、主なる神様は約束の地にいた若い世代のイスラエル人に、神様の律法に背く罪はどんな軍隊や敵よりも危険であることを思い出させました。私たちもまた、神様の御霊の力による大勝利を得た後、慰め主による平安や慰められる領域を持つことができるかもしれません。「慰め主」は、パラクレトス/ギリシャ語の英語聖書翻訳の一つです。このメッセージでの私のポイントは、主なる神様はイスラエル軍に「罪」との戦いが終わっていないことを警告されたということです。

ヨシュアはイスラエルの民を神様の律法への再誓約へと導く

＜ヨシュア記 8 章 30 節-32 節＞を読みます。

＜ヨシュア記 8 章 30 節-32 節＞

30 ついでヨシュアは、モーセが命じたとおり、イスラエルの神である主のためにエバル山に祭壇を築きました。

31 律法の書に、「わたしのために、のみを当てたことのない石で祭壇を築け」と言われているとおりに。祭壇が完成すると、祭司たちはその上に、焼き尽くすいけにえと和解のいけにえをささげました。

32 またヨシュアは、人々が見守る中で、祭壇の石に十戒を刻みつけました。

＜出エジプト記 20 章 25 節＞において、神様がモーセに命じたことをヨシュアがどのように覚えていたかに注目してください。

＜出エジプト記 20 章 25 節＞

石を使うのはさしつかえないが、切り石はいけない。道具を使って、石をけずったり刻んだりしないようにしなさい。そんな石はわたしの祭壇にふさわしくない。

神様は、人は罪の中に生まれたのだから、神様が自然に創造された岩に道具を使って改良を加えようとしても、それは聖なる使用には適さないと教えておられます。建てる者が拒んだ石であるイエス・キリストの全ての必要を満たす能力のお方を、追加したり、改良したり、変えたりしようとする人間の哲学や発明は、今日、この世に存在します。＜ペテロ手紙 I 2 章 7 節＞に使徒ペテロはこのように書きました。

＜ペテロ手紙 I 2 章 7 節＞

キリストは、信じる者にとって何よりも尊い方ですが、キリストを拒む者にとっては、「つまずきの石、妨げの岩」となりました。「家を建てる者たちの捨てた石が、なくてはならない土台石となった」（詩篇 118・22）とあるとおりです。

＜ヨシュア記 8 章 31 節＞に、

31 律法の書に、「わたしのために、のみを当てたことのない石で祭壇を築け」と言われているとおりに。祭壇が完成すると、祭司たちはその上に、焼き尽くすいけにえと和解のいけにえをささげました。

これは、神様の民が血の犠牲を主なる神様の祭壇に捧げたことを言っています。主であられ、父なる神様は、私たちの永遠の平和のために、すべての時のための最後の血の犠牲として、御子イエス様をご自身の祭壇である十字架に置かれました。イエス様の十字架上の御業は、父なる神様への申し分のない従順でした。この完成された御業には、追加も変更も必要ではありません。その血の犠牲によって、信じる者すべてを裁きのもとに滅びることから救ってくださったからです。

私たちクリスチャンも、人生で何かをやり直したいと夢見たり願ったりするとき、自分の考え方に誤りや重大な間違いをするかもしれません。もしかしたら失敗だったかもしれないし、罪に導いたかもしれません。しかし、私たちは不信心に思考しています。罪深い思考の道具で、救いの石を切り込んでいます。過去を変えることはできませんが、祈りの中でイエス様のもとに過去を持っていくだけです。比べることができない苦しみの十字架の上で、イエス様は現地の言葉に留意し、イエス様は「完了した。」と言われました。＜ヨハネの福音書 19 章 30 節＞を読みます。

＜ヨハネの福音書 19 章 30 節＞

それをお受けになると、最後に、「すべて成し遂げた」とひとこと叫び、頭を垂れて息を引きとられたのです。

イエス様は「完了した」という言葉をギリシャ語で話されました。なぜなら、ご自分の最後の言葉が、エルサレム全土、そしてエルサレムを越えて、ギリシャ語で「テテレスタイ（完了した）」と語られることを知っておられたからです。

イエス様が十字架にかけられた当時、ギリシャ語はビジネス言語でした。不動産業に関して、「住宅ローンは全額支払い済みです」という意味でした。今日、大阪でナンバープレートに英語で「PAID IN FULL（全額支払済み）」と書いてある車を見ました。私たちクリスチャンは、新車を買ってもらったり、支払ってもらったりするよりもずっと大きなものを持っています。それは「天国の私たちの家の購入は、全額支払い済み」ということです。

私たちの失敗にもかかわらず、私達はこの信仰を続けるとき、私達は日々更新されたイエス様の血潮の新しい契約を持っているのです。私たちは、イエス様が完了されているので、「やり直し」は必要ないのです。

次にヨシュアは、モーセが何年も前にイスラエルに教えた実地訓練を繰り返します。＜ヨシュア記 8 章 33 節＞を読みます。

＜ヨシュア記 8 章 33 節＞

33 それから、長老、裁判官、在留外国人も含むイスラエル人全員は二組に分けられ、一方はゲリジム山のふもとに、もう一方はエバル山のふもとに立ちました。両者の間には、主の契約の箱をかつぐ祭司たちが全員を祝福しようと待ちかまえていました。すべて、先にモーセが命じたとおりに行われました。

モーセはヨシュアにヨルダン川を渡り、またエバル山に到着するまで、この実地訓練のために待つように指示しました。これは、イスラエルの人々に重大な決断を下すよう思い出させます：イスラエルの人々は神様の法に従うことに尽力するのかしらないのかです。

ゲリジム山の部族は、モーセに与えられた神様の律法に従うすべてのイスラエル人に祝福を宣言します。

エバル山の部族は、神様がモーセに与えられた神様の律法に従わない者すべてに呪いを宣言します。

レビ人の祭司は、イスラエルの民が神様に服従することに影響を与える責任を引き受けるために話しました。

祝福とのろいの両方の約束を聞いたとき、イスラエルの人々は実際にアーメンと答えました。神様はいつもご自身の民であられるイスラエルの民のすべての心を見ておられました。神様は、イスラエル人の誰もが神様の律法を完璧に守れないことを知っておられました。神様は、主なる神様への愛から神様の律法を霊的に守ろうとする人々を知っておられました！

今日、私たちはイスラエルの民と同じ神様がおられます。イエス様は私たちのためにとりなしてくださいませ。しかし、その事実があっても、心から神様を愛するという命令は変わらないことをイエス様は明らかにされました。 イエス様はこのことをくマタイの福音書 22 章 36 節-38 節>で述べられました。

<マタイの福音書 22 章 36 節-38 節>

36 「先生。モーセの律法の中で一番重要な戒めは何でしょうか」と尋ねました。

37 イエスはお答えになりました。「『心を尽くし、たましいを尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』」

38 これが第一で、最も重要な戒めです。

ヨシュアは、老人や若い人のすべての民が、モーセを通して命じられた祝福とのろいを聞いたことを確認しました。この服従の実地訓練は、戦いの煙とアドレナリンが、約束の地での平安という安心できる領域に落ち着くまでという時間を決められました。

神様は人間を創造されました。肉体的なものであれ、霊的なものであれ、戦いの中で私たちの命が脅かされるとき、私たち全てが絶望的な状況下でどのように切実な祈りを行うことができるかを、神様は知っておられます。

世界中の軍隊のほとんどの歩兵は、敵の銃撃から身を守るために狐穴を掘っています。戦いが終わると、兵士たちは自分たちを救ってくださった神様のことを忘れてしまうことがあまりにも多いです。まあ、私たちクリスチャンもこの点では非常に人間的です。神様は、ヨルダン川の横断とエリコの城壁という最も不可能な挑戦を征服した後、イスラエル人の戦いにおける勇気が、自己満足や霊的な怠惰や怠慢になりかねないことを知っておられました。

また、ヨシュアとともに勇ましく行進したイスラエルの民は、神様がエジプトで、また紅海を渡る際に不思議な御業をされたとき、ただの子どもであったことを覚えていてください。イスラエルの民はおそらく多少の詳細を覚えていましたが、主なる神様はイスラエルの民が罪のためではなく、戦争が終わっていると感じるかもしれないので、主なる神様に再誓約する必要があることを知っておられました。本当にこれから先に肉体的な困難は少ないでしょうが、人生における非常に快適な領域または安心できる領域における霊的な危険は、また違う危険性があるでしょう。

イスラエルの全ての民がエバル山とゲリジム山に立ち、神様の律法を守らない、あるいは従うことへ語られた呪いと祝福にアーメンと叫びました。神様はイスラエルの民に、彼らの前に立ちただかる戦いで直面するカナン兵や巨人よりも、神様を恐れてほしかったのでしょう。神様はイスラエルの民を愛しておられたから、この神様への恐れを望まれました。ヨシュアの後世代でダビデのような人達が律法を守る生き方をしながら心から神様を愛しました。神様は心と心のふれあいを望んでおられましたし、今も望んでおられます。しかし聖書は、ダビデ王が安心できる領域で戦争が終わっていると感じることがいかに危険であるかの例であると語っています。

ダビデとバテ・シェバ - 安心できる領域での罪の危険

<サムエル記Ⅱ 11 章 1 節-3 節>を読みます。

<サムエル記Ⅱ 11 章 1 節-3 節>

1 翌年の春になると、再び戦いが始まり、ダビデはヨアブの率いるイスラエル軍を送り込んで、アモン人壊滅を計りました。イスラエル軍はたちまちラバの町を包囲しましたが、ダビデ自身はエルサレムにとどまっていました。

2 ある夕暮れのことです。昼寝から起きたダビデは、宮殿の屋上を散歩していました。見ると、水浴びをしている美しい女性が目に留まりました。

3 さっそく人を送り、その女のことを探らせました。そして、エリアムの娘でウリヤの妻バテ・シェバであることを知ったのです。

ダビデはバテ・シェバと不倫の罪を犯しました。バテ・シェバが妊娠したので、自分の罪を隠すために、ダビデはヨアブ将軍に命じて、バテ・シェバの夫ウリヤを戦死するように仕向けました。それは殺人でした。ダビデの神様への心は、悔い改めと主なる神様への愛による完全な明け渡しへとダビデを導きました。

罪には高い代償があります！ ダビデは、バテ・シェバとの間に生まれたイスラエルの王としての長男を失いました。神様がその子を取り去られた後、神様はダビデの家族に絶え間ない戦争を宣告されました。ダビデは神様を愛することをけっしてやめませんでした。ダビデの悔い改めはとても深く、美しかったので、神様はダビデの悔い改めを詩篇 51 篇の中で聖書に記されました。

何百万人ものクリスチャンが、罪を犯した後主イエス様との親密な関係を取り戻すために読む聖書箇所となっています。ダビデ王は、紅海を開く力は、私たちを誘惑や罪から解放する力または神様と同じであることを知っていました。ダビデは＜詩篇 51 篇 12 節＞にこう書いたからです。

＜詩篇 51 篇 12 節＞

救いの喜びを再び鮮やかにして、心からあなたに従おうとする思いに満たしてください。

エバル山とゲリジム山での実地教訓は、ダビデ王のような罪を神様の民が犯さないようにするためのものでした。＜マタイの福音書 22 章 37 節-38 節＞のイエス様の言葉をもう一度見てみましょう。

＜マタイの福音書 22 章 37 節-38 節＞

37 イエスはお答えになりました。「『心を尽くし、たましいを尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』」

38 これが第一で、最も重要な戒めです。

ダビデ王は不倫と殺人によって神様の律法を破りました。ダビデ王は以前、心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、常に神様であられる主を愛することに完全に人生を献げていたと私は信じています。ダビデ王は失敗しました。ダビデ王は罪を犯しました。ダビデ王は悔い改めました。ダビデ王は主なる神様を愛し続けました！ それはダビデ王の終わりではありませんでした。ここにいる方も神様に対して罪を犯した者にとって終わりではありません。

約束の地に向かって荒野を旅するイスラエルの民は罪を軽く見ていました。そして多くの者が荒野で神様の怒りのもと死にました。＜コリント人への手紙 I 10 章＞で、使徒パウロはクリスチャンたちに、イスラエルの民がそうであったように、霊的な生活において満足したり、怠惰になったりしないようにと警告しています。使徒パウロはコリントの信徒たちに、罪に抵抗しないイスラエルの民の失敗から学ぶように念をおしています。＜コリント人への手紙 I 10 章 6 節-12 節＞を読みます。

＜コリント人への手紙 I 10 章 6 節-12 節＞

6 この事実から、大切な教訓を学べます。悪事を追い求めてはならないこと、

7 また、偶像を拝んではならないことです。〔聖書には、金の子牛を拝むために、「人々は座っては飲み食いし、立っては踊った」と書いてあります。〕

8 ほかに教訓があります。彼らのうちのある人たちが外国人の女と不道德な罪を犯した時は、一日のうちに二万三千人もが死にました。

9 彼らのように、主がどれだけ忍耐してくださるかを試すようなまねをしてはなりません。主を試そうとした人たちは、蛇にかまれて死にました。

10 また、彼らのように、神に向かって文句を言ったり、「神のなさり方は不当だ」などと不平を言ってはなりません。そのために、神様は天使を遣わして、彼らを滅ぼされたのです。

11 先祖たちの身に起こったこれらのことは、同じことをくり返してはならないという私たちへの警告です。それが記録されたのは、世の終わりが近づいている今、私たちがそれを読んで教訓を学ぶためです。

12 ですから、よく注意しなさい。「私は、そんなことは絶対にしないから大丈夫」などと思っている人がいれば、そういう人こそ注意しなければなりません。同じ罪を犯すかもしれないからです。」

パウロは＜コリント人への手紙Ⅱ 7章4節＞で、これらの同じコリントの信徒に語ったイエス様の同じ使徒です。

＜コリント人への手紙Ⅱ 7章4節＞

私はあなたがたに信頼を寄せ、あなたがたをたいへん誇りに思っています。私はあなたがたのことで大いに勇気づけられ、どんな苦しみの中でも喜びに満ちました。

イエス様の羊へのパウロの愛に満ちた配慮は、＜ヘブル人への手紙 10章35節＞でもパウロにこう書かせました。

＜ヘブル人への手紙 10章35節＞

このようなすばらしい祝福が待っているのですから、どんなことがあっても、主を信じ続けなさい。やがて主から受ける報いを思いなさい。

この最後の聖書の一節は、エバル山とゲリジム山にいるイスラエルの若い世代に本当にぴったりと当てはまる、または、合致します！また、＜コリント人への手紙Ⅰ 10章12節＞の警告にある謙遜でいるようにという呼びかけにも合致します。

＜コリント人への手紙Ⅰ 10章12節＞

12 ですから、よく注意しなさい。「私は、そんなことは絶対にしないから大丈夫」などと思っている人がいれば、そういう人こそ注意しなければなりません。同じ罪を犯すかもしれないからです。」

謙虚に生きることは、自信を持って生きることです。世の罪人、そしてあまりに頻繁に私たちクリスチャンは、成熟したクリスチャン、ダビデ王のような心を持つクリスチャンたちの心の中で謙遜と自信がともに一緒にされていることを理解していません。パウロは、彼が警告するクリスチャンたちに、この次の聖書箇所にしっかりより頼むことを望んでいます。

＜コリント人への手紙Ⅰ 10章13節＞

このことを覚えていてください。あなたがたの生活の中に入り込む誘惑は、別に新しいものでも、特別なものでもないということです。ほかにも多くの人たちが、あなたがたよりも先に、同じ問題にぶつかってきたのです。どんな誘惑にも抵抗するすべはあります。神様は決して、とても打ちできないような誘惑や試練に会わせたりはなさいません。神様がそう約束されたのであり、その約束は必ず実行されるからです。神様は、あなたがたが誘惑や試練に忍耐強く立ち向かえるように、それから逃れる方法を教えてくださいます。

さて、荒野で反逆したイスラエルの民のこれらの子供たちは、ヨルダン川の「安全な」側で神様の律法を繰り返されました。神様は、神様に選ばれた民の若い世代が罪よりも神様を選びやすいよう、健全な恐れを創ることを望まれました。裁きを恐れて生きることなく、私たちは決して罪を軽んじてはなりません。

私は、気持ちがある程度落ち込むことと闘うとき、サタンがキリストにある私の安心を疑うようにもちかけていることに気づいています。そして、私がイエス様の近くを歩きながら、とても元気になっていると、サタンは娯楽の楽しみの誘惑を送ります。これから先の現在の課題だけでなく、私たちの気分によっても、しばしば異なる油断のない態度が求められます。しかし、イエス様とともに歩もうと探し求めることが長ければ長いほど、神様がどれほど大きな力と臨在を注いでおられるかがわかります。神様が＜コリント人への手紙Ⅰ 10章13節＞に記載させています：

＜コリント人への手紙Ⅰ 10章13節＞

このことを覚えていてください。あなたがたの生活の中に入り込む誘惑は、別に新しいものでも、特別なものでもないということです。ほかにも多くの人たちが、あなたがたよりも先に、同じ問題にぶつかってきたのです。どんな誘惑にも抵抗するすべはあります。神様は決して、とてもたち打ちできないような誘惑や試練に会わせたりはなさいません。神様がそう約束されたのであり、その約束は必ず実行されるからです。神様は、あなたがたが誘惑や試練に忍耐強く立ち向かえるように、それから逃れる方法を教えてくださいます。

安心できる領域と慰め主（聖霊なる神様）

神様の子どもたちの力と平安は、ともに慰め主である聖霊なる神様の働きです。イスラエルの民が約束の地カナンに入るときも慰め主である聖霊なる神様の働きでした。それは、イエス様とともに天国の約束の地へと歩むクリスチャンにも本当に慰め主である聖霊なる神様の働きです。

私たちが自分で作り出した快適さは、神様が私たちの人生のある時期だけを意味する**安心できる領域**に私たちを留めるよう、しばしば、神様に強制しようとするものです。これは、神様にとって聖くない神様の祭壇を人間の手で切った石や切り出した石で築いた例です。

これは、私たちがむなしい哲学や罪深い行動で聖霊なる神様を悲しませることにつながります。これは、私たちの人生におけるイエス様の真の導きに抵抗することです！これは単にイエス様を信頼せず、自分自身に「天の父なる神様が一番よく知っておられる！」と言っているだけです。

私たちが主イエス様への謙遜と信頼が一緒にされる状態にとどまるように祈るとき、聖霊なる神様の力は私たちの前の私たちの紅海（不可能な状態）を開くだけでなく、罪からの危険を確信させ、神様の臨在と平安で慰めてくださいます。

私たちは聖霊なる神様の霊によって、最も困難な戦いの最中に真の平安を得ることができます。私たちは、＜コリント人への手紙Ⅰ 10章13節＞に、誘惑に陥ったときの助け手としての約束があります。慰め主（聖霊なる神様）は、イエス様を私たちにとってより現実的な存在にしてくださいます。

聖霊なる神様の力強い臨在は、私たちがイエス様のものであるというさらに大きな証しを意味します！ 聖霊なる神様が力強く現れるときはいつでも、私はいつも「イエス様だ！」と言ってしまします。そして、そのことを知って、とても慰めになっています。

祈りましょう！